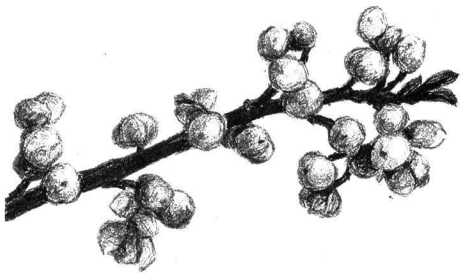
朝日 俳壇 歌壇



〈アオモジⅡ〉　日高理恵子

長谷川 櫂 選

☆古びたら旅に出でなむ春の雲　（箕面市）櫻井　宗和
春愁を玻璃に映して歩きけり　（市川市）をがはまなぶ
マフラーをひょいと私に巻いた人　（新庄市）三浦　大三
福島はつひに戻らず冬木の芽　（福島県伊達市）佐藤　茂
夢一つ捨てし高二の春まだき　（豊前市）三原　逸郎
老人のすなる春愁かぎりなし　（境港市）大谷　和三
水仙花夜までつづく憤　（長崎市）村山信一郎
春の雪子らにぎやかに下校せり　（東京都府中市）志村　耕一
卒業歌どれも恩など知らぬ顔　（神戸市）金澤　健
白魚は桶に蓬は竹籠に　（津市）中山　道治

【評】一席。「古ぶ」とは時代に追い越されること。たいした時代ではないが。二席。ショーウィンドーに映る春愁の人。あれは私？　三席。シャレた恋の句。その後どうなったか。十句目。今年も伊勢の白魚の句が届いた。白と緑が春らしい。

大串 章 選

卒寿なほ踏み出す一歩草萌ゆる　（敦賀市）中井　一雄
風葬の如く溶けゆく雪達磨　（苫小牧市）齊藤まさし
肩車されはじめての梅見かな　（浜松市）久野　茂樹
薄氷や風の記憶を閉じ込める　（柏市）田頭　玲子
もう歳のわからぬ父へ年の豆　（春日部市）池田　桐人
考へてゐるかのやうに雪の降る　（八王子市）額田　浩文
火口湖の凍湖を渉る朝日中　（小城市）福地　子道
大和路の光あつめて梅ひらく　（奈良市）田村　英一
薄氷のその下にある明日かな　（大阪市）中崎　千恵
捨てられぬ父の軍手と防寒帽　（川口市）青柳　悠

【評】第1句。卒寿には卒寿の未来がある。「草萌ゆる」が効いている。第2句。「風葬の如く」が言い得て妙。雪達磨はやがて溶けて無くなる。第3句。肩車に乗った幼児がまじまじと梅の花を見ている。「はじめての梅見」である。

高山れおな 選

二ン月やなにげに鳶の鳴く日なり　（境港市）大谷　和三
ぐずる子に「ほれ」と人参朝市女　（小平市）田中　杏花
木の上に積もった雪は白いまま　（神戸市）川村　充良
冬の底叩きて過ぎぬ終電車　（湖南市）鈴木　強
ロンドンの春節雪の中華街　（東京都世田谷区）松木　長勝
襟巻の狐の語る絵空事　（松山市）杉山　望
新しき鞄の軽さ風光る　（宮崎市）山野　楓子
春星のかなたセイジもカラヤンも　（長野市）縣　展子
練切の椿菜の花春立ちぬ　（豊田市）花園　まあ
よろよろと推し活に行く春帽子　（大阪市）長島　敬子

【評】大谷さん。「なにげに」という俗語がはまっている。田中さん。「ほれ」が写生ということになるか。とにかく端的だ。川村さん。地面の雪が泥混じりに汚れてゆくのと対照的な樹上の雪の白さ。着眼も言葉遣いも素朴だが、そこが佳い。

小林貴子 選

「鬼は好き」ささやく君の鬼やらい　（立川市）須崎　武尚
ハチ公に懐く子犬の雪像が　（群馬県みなかみ町）長浜　利子
植物性フェルト感です猫柳　（筑後市）近藤　史紀
☆古びたら旅に出でなむ春の雲　（箕面市）櫻井　宗和
春雨や艶な話をしたくなる　（福岡市）高山　國光
問ふごとく白鳥吾を見つめをり　（宮城県美里町）狩野　宏史
勝鶏に余力あり駆けまはりけり　（東京都足立区）望月　清彦
カリカリとザラメ噛むカステラは春　（奈良市）藤岡　道子
自己に振るG線上のアリア春　（北九州市）中村テルミ
春立つや妻を誘ひてカフェテラス　（津市）冨田　正宏

【評】一句目、日本じゅうが「鬼は外」と叫ぶ日、一人に「鬼は好き」とささやかれたら、鬼はめろめろだろう。二句目、東京の積雪の日、ハチ公の隣の雪のハチ公は可愛かった。三句目は猫柳の特徴を比喩で捉え、「です」の表現に心温まる。

うたをよむ　花の山姥

長谷川　櫂

俳人の黒田杏子さんが亡くなって十三日で一年が経つ。飯田龍太の故郷・甲州境川（笛吹市）での講演の翌朝、旅館で倒れ、次の日、不帰の人となった。

先月、夫の勝雄さんによって東京本郷の自宅近くの法真寺にお墓ができた。墓碑に刻まれたのは、

花巡るいっぽんの杖ある限り

昨年八月の誕生日に刊行された遺句集『八月』の句である。黒田さんは三十歳の春、花巡礼を思い立ち、日本全国の桜を訪ね歩いた。「花巡る」の句はその五十年後の句である。このときすでに脳梗塞を患い、車椅子を使い、自分の足で歩むことなどできなかったことを思えば、壮絶な悲願の一句である。

黒田さんの胸には若いころ衝撃を受けた遊行上人、捨て聖一遍の面影が生涯宿りつづけていたにちがいない。歩きに歩き、足が止まれば念仏を唱えながら踊る。そうするうちにやがて身も心も呆々として草木や鳥獣や人々と一つになる。

八十の花の記憶の無盡蔵
流離へとなほ呻吟へと飛花落花

おそらく黒田さんは捨て聖一遍の心のままに生きようとしたのだろうし、その切実な願いから黒田杏子の俳句の世界が生まれたのではなかったか。この黒田さんの世界を早々と見抜いていたのがじつは龍太だった。死の二日前の境川での講演は龍太への感謝に満ちていた。

黒田さん死後の朝日俳壇に〈**杏子とふ花の山姥大往生**〉（松村幸一）という追悼句が載った。「花の山姥」という賛辞がふさわしいのはこの人くらいしかいない。本人も喜んでいるだろう。（俳人）

風信

大松達知歌集「ばんじろう」　歌誌「コスモス」選者で教員の著者による第6歌集。〈がんばれるようにがんばりますと言って来なくなりたり月曜日から〉（六花書林・2750円）

楠誓英歌集「薄明穹」　神戸に生まれ育ち、いまも暮らし続ける著者の第3歌集。〈階段は途切れて鳥ととびたてば須磨の海ゆく帆船の見ゆ〉（短歌研究社・2310円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に**住所、氏名、電話番号を明記**。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。